前半小テストの採点集計を終えましたので、簡単に講評しておきます。まずは、成績の分布から。

	A+	A	B	C	F	総計
4回生以上	0	3	8	7	6	24
3回生	4	26	17	14	6	67
2回生	6	47	29	14	11	107
総計	10	76	54	35	23	198

設問は、「ダールの多元主義理論について説明せよ。特に、多元 (plural) というのは複数存在するという意味だが、何が複数あると言っているのかに着目して説明せよ。」というもので、実はこの問題は古典的なもので、私を含め政治過程論の担当者は関連科目の試験問題として何度もこれを使ってきています。要するに、何が多元と言っているのかというのがポイントで、アクター、アリーナ、権力資源の三点が書ければ OK という問いでした。CPS 論争から説明したり、非決定論による批判に言及したりという書き方も考えられますが、もちろん、問われているのはダールの多元主義の説明なので、そういうのは特に必要ではありません。書いてもいいですが、教科書中でこの点に触れている部分を正しく見つけられた人はこの三点が書けており正解ということになるでしょう。43-44 ページ、とか、61 ページに端的な記述があります。A が多いのは教科書の中から適切な記述を見つけ、これを書いた人が多いからです。

それはともあれ、CPS 論争から書いている人が、ダールがニューヘヴンで行ったことに触れていれば、自動的にアクターの多元性とアリーナの多元性について書くことができているはずで、B の答えはおおむねそういう答案です。権力資源の多元性に触れることができていない答案。

これにアクターが相互作用する中で用いる権力資源の多元性についても触れることができているれば、A をとれる答案になります。多元主義と権力資源の多元性、ハンター流のエリート理論が想定している資源の累積性の否定につながった議論が出来ていればいいということです。

アクター、アリーナ、権力資源（表記はそれぞれ違うものでも同義と考えられれば OK です）の三点が書けていれば A、アクター、アリーナの 2 点はあるかな、というのが B、論じてはいるのだけれど分かっているのか分かっていないのか判断に苦しむのが C、関係するところが何も書けていない（字数を費やしていても設問に答えたことにならない部分是不実記載です）というのは F です。

それでも書いてくれた F は数値換算で落第ではあるが幾分の得点はあるという数値を入れています(たとえば 50 点)。当日出席せず、事由を述べて代替措置のレポートを出したわけでもない F は 0 点ですので、後半に関する小テストの点と集計するときに、0 点だと後半について A+をとっても集計した全体成績は落第ですが、50 点なり入っていれば、後半の成績次第で単位は取れることになります。その辺、少し日常評価への配慮も込めました。

欠席による代替措置を認められた人が 9 名いました。これらの人々に対する課題は「前決定過程に関する議論は、政治過程論に対して、いかなる意味での理論的寄与を果たしているか、論じなさい。」というもので、こちらは調べて書けるレポートということになっているので、すこし辛めに見ました。前決定過程というのは顕在的政策過程が動き出すまでのアジェンダセッティングを指し、これが、非決定理論のような論証不能な一種の神話に解消するのではなく、特定の課題がアジェンダとなっていくメカニズムに触れていく議論ですから、扱われる政策の特性そのものに当然ながら注目するのです。政策の特性によりアジェンダになりやすい・なりにくい差異があったり、アジェンダに導かれる経路に差異が生じたりするという議論につながっていくわけですが、このところが政策の特性によりそれがどのようなプロセスに乗っていくかに差異が生じていくというアリーナ理論とほぼ同じ分析上の焦点を持っていることが理解されるでしょう。政治過程理論への寄与として、まず、アリーナ論、すなわち、複数の政策過程へと理論を導いたということが論じられていれば OK です。これがさらに国家の復権へとつながっていく、ということですが、そこまでは設問で求められているところではないでしょう。おおむね書いていましたが、ただ、書いただけ、というレポートもありました。